

黒人研究の会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.64 (December 31, 2006)

第64号 2006年12月31日

例会発表要旨

7月例会 2006年7月8日 神戸市外国語大学

フレデリック・ダグラスのマスキュリニティ言説における「二つの戦い」

朴 珣英

19世紀のアメリカでは強固な黒人奴隷制度のもと、白人至上主義によって黒人の“manhood”が否定されていた。

しかしフレデリック・ダグラスは、英語の“man”あるいは“manhood”という語のもつ、文脈に応じて「男性／人間」、「男性性／人間性」と意味が変わる曖昧さを巧みに利用し、黒人の人間性があらかじめ否定されていた社会において「存在しないはず」の黒人のマスキュリニティを主張した。すなわちジェンダー化された視点を利用することで、男性的資質の理想(masculine gender ideal)を人間の資質(humanity)へと高め、それを黒人解放の言説として利用したのである。

本発表は、ダグラスがとりわけ急進的で過激な黒人解放の理念を提示する1850年代のアンテベラム期から、次第に政治的な方向へと姿勢を立て直していくこととなる南北戦争期を中心に、ダグラスのマスキュリニティ言説が状況に応じて巧みに取捨選択され構築されていく過程を検証するものである。

9月例会 2006年9月23日(土) キャンパスプラザ京都

シンポジウム <大地の記憶：エスニックの地平から>

コーディネーター : 松本 昇

木と水と空と：エスニックの地平から／大地の記憶

「海が歴史です」(The sea is History)と歴史を大文字で書いたカリブの詩人デレック・ウォルコットの文章から窺えるように、カリブの紺碧の海に民族の歴史を読み込んだ場合、まずカリブには体制側の白人によって封じ込められた悲慘な歴史が浮き彫りにされる。次に、そこから民族の歴史(history)を回復するための闘いが起きる。この過程は、奴隷制を歴史に有するアメリカ黒人にも、

先住民にも当てはまる。今回のシンポの目的は、「大地」をキーワードにして、アフリカから拉致されてきたアフリカ系カリブ人、アフリカ系アメリカ人、それに祖先の土地を追われた歴史を持つ先住民に見られる共通項と差異を顕在化することにある。

① 先住民による大地の記憶の継承—Charles Eastmanの貢献について

三石 庸子

現在一般化したインディアンのイメージはイーストマン(1860-1936)の残した数多くの著作によるといわれているほど、多くの著作や講演によって先住民の紹介を行った、先住民を代表する人物であった。にもかかわらず、イーストマンが十分評価されていないのは、先住民の場合、民族主義的な英雄のみが注目されてきたからである。イーストマンのように、キリスト教や西洋文明など主流社会の価値観を受け入れた人びとは、先住民への背反者、人種差別主義者とみなされた。また、合衆国政府が先住民に対して同化政策を押し付けてきた歴史の中で、そのような人たちは同化主義者と位置づけられてきたという背景もある。

イーストマンは、先住民特有の自然の中での生活とモラルを、すでに失われたものとみなし、教育を受けてアメリカ市民として生きることがめざすべき唯一の道で

あると考えていた。しかし、主流社会の同化主義とは違い、先住民を白人より劣ったものとみなすのではなく、デュボイスと同じく、アメリカで対等な市民としての先住民の権利を主張する思想である。一方、先住民の自然の中での生活に対するイーストマンの愛情と誇りは、著書に明らかである。15歳まではサンティ・スー・インディアンとして伝統的な生活をしていたイーストマンが晩年、冬以外はカナダのヒューロン湖の北側で、水道もない小屋で暮らすことを選んだという事実は興味深い。大地の記憶の継承者としてイーストマンを位置づけた。

② 女たちの大地：閉ざされた土、開かれた土

西垣内 磨留美

本発表においては、アフリカ系アメリカ人の文学における「大地」に関わる検討を行い、特に女性たちにとっての「大地」に目を向けた。女性にとっての大地の様々なあり方、それとの多重的な関わりをとらえるために、アメリカ国土のレベルから土のレベルまでの4部構成とした。「北部に対する南部」では、デルタ地帯から都市部へ移住した黒人女性への面接調査に基づく論文を参考に検討した。「二つの大地」では、南部の大地が閉鎖的、重圧的な側面を持ち、その中で女性たちが生存の知恵として求めた庭との関わりが存在したことに焦点を当て、南部の大地の両義性を検討した。「聖域としての庭」においては、大地に神性を付与する西アフリカのとらえ方も交え、“Everyday Use”を扱った。「泥の表象」では、Patricia Yaegerの論文を参照しつつ、*Their Eyes Were Watching God*、および“Strong Horse Tea”を扱い、泥が逃れられない苦境を表すとともに束縛からの解放の表象としても機能していることについて考察した。

③ 地図のない場所に生きる女たちへの賛歌——Audre Lordeの*Zami: A New Spelling of My Name*におけるレズビアン・ボディとトランスナショナル・フェミニズム

中地 幸

「私はいつも男と女の両方になりたかった——私の中にある母と父の最も強く豊かな側面を調和させたかったのだ。ちょうど大地が丘や峰を持つように、私の身体に谷間と山々を持ちたかったのだ」(7)とオードリー・ロード (Audre Lorde) は

その自伝的作品である『ザミ——私の新しい名前』 (*Zami: A New Spelling of My Name* 1982年) の序を始めています。ここでロードは、理想の身体のイメージを山や谷のある大地になぞらえますが、ロードがレズビアンとしての理想的な身体のイメージを体現するものとして描きだすこの土地は、ロードの母の故郷であるカリブ海の小アンティル諸島の南端にあるグレナダの自然のイメージの反映といえます。今回の発表では、カリブという土地がいかに関係のレズビアン・アイデンティティの確立の問題と関わっているかに焦点をあてながら、ロードの乳癌との闘いの問題も含め、作品を分析していきたいと思えます。

コメント 「大地の記憶—エスニックの地平から」

司会 : 横田 由理

エスニック文学における「大地（土地）」の表象を取り上げ、その機能と意義を考察することがこのシンポジウムの狙いであった。3人のパネリストの発表の前に司会の方から「大地」という表象に関する従来からの視点を少し紹介した。

まず、自然表象のひとつとしての「大地」は、多くの文化圏において「母なる大地」という言葉で表されるように「父なる空あるいは太陽」に対峙するものとしてジェンダー化された表象となっている。作物を生み出す生産性、豊穡性が「産む性」としての女性と結びついているわけであるが、こうした限定的な視点に対しフェミニズムの観点から問題提議がされてきたことを指摘した。

第二に挙げたのはポストコロニアルな視点である。アフリカ系アメリカ人やカリブの人々は、自らのネイティブな土地から引き離されることによってその絆を断たれ、奴隷として抑圧の歴史を生きることによって土地との関係も特殊なものとなるというディアスポラの歴史の重荷を背負って来た。ネイティブ・アメリカンの場合は連邦政府による保留地への強制移住によって、民族固有の土地を奪われるという抑圧の歴史を持つ。このようにマイノリティという抑圧されてきた集団の土地との関係を考察する場合には歴史的な視点が不可欠となる。

さらに、土地と人との関わりに注目するとき、「土地の感覚」(sense of place)という言葉によって表される土地との本質的な関係は、たとえば、人間を自然の一部と考え自らのアイデンティティを固有の土地との関係の中で定義するネイティブ・アメリカンにとっては保留地への強制移住は単なる土地所有の問題ではなかったように、経済的社会的な意味合いを超えてさらなる問題を提示する。現代の非定住・移

動社会において都市居住者が増加する傾向にあるマイノリティ集団にとって大地の持つ現代的な意味も変化しつつある。

以上挙げた視点に今回3人の発表者によってさらに新しい視点が加えられ、エスニック文学における「大地」という表象が周辺的な状況との絡みの中で提示された。

10月例会 10月28日 神戸市外国語大学

① 『スター・ウォーズ』の宇宙人のイメージ
—— *Episode II*(2002)及び*Episode III*(2005)を中心に——

赤尾千

波

筆者はこれまで映画『スター・ウォーズ』シリーズにおける宇宙人のイメージに注目してきた。黒人研究の会では、過去に『エピソード1』における宇宙人のイメージがいかに従来のハリウッド映画の人種ステレオタイプに重なるものであるかを検証する口頭発表をおこなったことがある。

今回の発表では、最新作『エピソード2』および『3』に注目し、宇宙人のイメージについてVTRで画像を見ながら検証した。『2』『3』に登場する宇宙人で注目すべきものは、次の二種である：

(1) 以前の作品(『エピソード1』など)に出てきた宇宙人で、イメージが改善された宇宙人(グンガ人、ナイモディア人など)

(2) 新規に登場する宇宙人で、以前の作品の宇宙人に比べて人種ステレオタイプとの類似性が見出しにくいもの(ベザリスク人、カミーノ人など)

登場する宇宙人の多くが従来の人種ステレオタイプに似ているということで大いに批判されたのは『エピソード1』であるが、『2』『3』では、改善のためのさまざまな工夫が見て取れる。例えばグンガ人の登場場面は『1』に比べて極端に少なくなり、またナイモディア人の「作られたアジア訛りの英語」は、よりスタンダードな発音へと変わっている。一方、新しく登場する宇宙人の多くは、人種的な雰囲気を持っていない。容姿、言語(訛った英語)、動作などに工夫が凝らされているのである。

総じて『スター・ウォーズ』シリーズの宇宙人のイメージは、そのときどきの批評を受け、無難なものへと変化してきているということが分かる。

② 紹介：イギリス黒人の祝祭空間——ノッティングヒル・カーニバル

古川 哲史

イギリスにおける〈黒人〉の歴史や文化については、近年、国際的な枠組みでのブラック・ディアスポラ研究への関心の高まりもあり、欧米では様々な角度から注目され、解釈・再解釈されている。日本においても少しずつではあるが、イギリス帝国史研究などの発展と絡みながら、蓄積がなされてきた。

発表者はイギリスの〈黒人〉を専門に研究する者ではないが、かつて修士論文でノッティングヒル・カーニバル（Notting Hill Carnival）について少し論じたことがあり、また今夏（2006年8月）のロンドン滞在中にカーニバルを見る機会があったため、このイギリス黒人の祝祭的イベントを、自身が撮影した写真とともに紹介した。

現在、ヨーロッパで最大規模のカーニバルといわれるロンドンのノッティングヒル・カーニバルは、トリニダード系移民によって始められた。非公式には1950年代をその嚆矢とするが、1965年が第1回のカーニバルとみなされている。カーニバルの内容については、トリニダードに起源をもつスチールドラムのバンド演奏やカリプソの演奏、カリブやアフリカをテーマにした仮装行列、移動式のサウンドシステム、路上に設置されたサウンドシステムなどが特徴としてあげられる。

ノッティングヒル・カーニバルは、イギリスの人種関係に大きく影響され、過去には警官にたいする参加者の「人種暴動」も起こり、中止の危機に見舞われたこともあった。ジャマイカ系移民がレゲエを持ち込んだことにより、音楽面での変容も見られた。「体制」側がマイノリティの不満／エネルギーを路上で解消させる、安全弁的な社会装置に利用している面もあった。

トリニダード系移民を中心に発展したノッティングヒル・カーニバルは、現在、イギリス生まれの〈黒人〉の参加者の比率が高まり、さらには白人参加者をはじめ多人種・多民族化がすすんでいる。文化的伝統の発現と継承という側面を保ちつつ、観光化・商業化の波にもさらされている。多文化社会の現実とその実現可能性が議論される現代イギリスで、このカーニバルはその論議の行方を考える上で、注目に値するイベントである。

11月例会 11月25日 大阪工業大学

① 今日のトラウマ理論から読む*Beloved* :

「証言」と「受容」のアポリアとモリソンの反復強迫

時里 祐子

トラウマ理論の中心的人物Cathy Caruthは、トラウマ的体験というものを、体験者がその出来事を体験している最中には、体験しているという認識を持つことができないものとして捉え、人間の思考、記憶と言説のあいだに差異が存在することを指摘した。トラウマ的歴史はそれゆえ、「把握不可能」といえるが、その把握不可能な記憶に対して、ディスコースによる「解釈」という暴力を振るうことなく、際限なく耳を傾け続けるところに、歴史は立ち現れてくるはずである。Toni Morrisonの*Beloved*は、トラウマ記憶の「証言」とその受容の問題にまつわる、「原・暴力」に先駆的に挑戦した作品であった。作品内にはトラウマ体験の証言と受容にまつわるアポリアが描き出されており、また作品の構造は、いかに読者を解釈という「原・暴力」なしに、登場人物の「証言」に対峙させるか、という工夫に満ちている。本論では、それらの点を指摘した上で、歴史証言をフィクション化する、つまりディスコースの力を歴史に介入させる行為において、モリソンが拭い去れなかった自己懷疑を、DenverのSetheに対する恐れのうちに読み取ることを試みた。

② *A Squatter's Tale*, by Ike Oguine, 2000, Heineman, について

北島義信

主人公オビは、1990年代のナイジェリアのラゴスで、金融会社に勤め、豊かな暮らしを送っている。しかしながら、金融バブルが破裂して、勤務先の会社が倒産してしまう。彼は生活のため、アメリカへ渡ることを余儀なくされる。しかしながら、アメリカでの生活は厳しく、彼は貧困生活を送ることになる。他方、親戚にあたる医者「成功者」として、アメリカで物質的には豊かな暮らしを送っているものの、人種差別を受け、人間疎外に陥っていることを彼は知る。人種差別や物質中心主義を乗り越えて、人間疎外から解放されるには、「見返りを求めることなく、

他者のために生きる」というアフリカの価値観をもつことが必要である。このことを彼は若いアフリカ人女性ヴィヴィアンから学ぶ。この作品の魅力は、アフリカ人であるオビにとって、人間疎外から解放されるにはアフリカの価値観が必要だという認識が、アフリカではなく、アメリカにおいてえられたという点である。

12月例会 2006年12月9日(土) キャンパスプラザ京都

①甦る混血の魔女たち—ティチューバとサリー・ヘミングス—

石田 依子

マリーズ・コンデの『私はティチューバ、セイラムの黒人魔女』は、歴史的事実を基として書き上げられたフィクションである。周知のとおり、セイラムの魔女裁判に関しては歴史の分野でも多くの研究が行われ、アメリカ史の出来事の中でもよく知られているが、この事件を引き起こすきっかけとなった肝心のティチューバについての研究はほとんどなく、彼女の存在は歴史の片隅に追いやられていると言っても過言ではない。今回の発表の主旨は、マリーズ・コンデの『私はティチューバ、セイラムの黒人魔女』とバーバラ・チェイス＝リボウの『サリー・ヘミングス』の比較検討の試みである。『サリー・ヘミングス』を書き上げたチェイス＝リボウ、『私はティチューバ』においてティチューバを蘇らせようとしたコンデ、この二人のコンセプトの中には、どちらもアメリカの歴史から抹殺された実在の黒人女性を蘇生させたいという類似点が見出せるのではないだろうか。もっとも、彼女たちに接点があるとは考えられないので、どちらかがどちらかに影響を与えたという類の話ではないし、また、アフリカ系アメリカ文学にしても、カリブ文学にしても、黒人女性作家が作品の中で黒人女性の声を描き、アイデンティティ回復に従事するというのは当たり前のことであって、この二人に限ったことではないが、アメリカの歴史の中でも重要な事項に関わりながら、記録もほとんど残っておらず、マージンに追いやられた実在の人物に注目したという点で、この二人の作家の作品を比較検討した。

バーバラ・チェイス＝リボウの場合、歴史を改変することによって、サリー・ヘミングスのアイデンティティを回復させようとしたことは間違いないし、その点は

コンデが『わたしはティチューバ』を書いた目的と似通っているが、歴史に対する二人の女性作家に相違が見られると思われる。コンデ自身が語っているように、『わたしはティチューバ』では、歴史はあくまでも事件の顛末を語っていくための材料に過ぎず、重要なのは、むしろフィクションである後半部、つまり、ティチューバについての記録が一切残されていない部分であろう。一方、チェイス＝リボウの『サリー・ヘミングス』は、ジェファーソンとサリーを取り巻く人物たちの証言や、様々な史実がきめ細かに語られていることから、作者は歴史というものをかなりの程度で重要視しているのではないだろうか。つまり、チェイス＝リボウの場合は、小説そのものはたとえフィクションであっても、サリー・ヘミングスが実際にジェファーソンに愛され、彼との間に子孫を設けたのだということを、史実という舞台設定や登場人物で補強しつつ、ある程度の信憑性を持たせて描かなければ、サリーのアイデンティティ回復を果たすことはできなかつたのではないかということである。それは、テーマとなっている異人種混合の問題が、実際に今もアメリカには存在し、それはサリーだけの問題ではなく、彼女の子孫たちの問題でもあるので、ヘミングス一族のアイデンティティを回復させるためでもあったからである。コンデの場合は、テキストに書かれた内容がどの程度歴史的に信憑性があるかは一切関係ない。彼女にとって重要だったのは、ティチューバに彼女自身の言葉で物語を語らせることであり、サリー・ヘミングスのように彼女の言ったことの裏づけとなるようなその他の証人は必要なかつたのだ。コンデにとって重要だったのは、物語の信憑性を補強する「歴史」ではなく、ティチューバ自身の「歴史」だったと言えるだろう。『わたしはティチューバ』も『サリー・ヘミングス』も、史実とフィクションが混濁したハイブリッドなテキストであることは同じだが、前者の場合は、既成の歴史にこだわらないという点で、よりカリブ文学らしい特徴が現れていると言えよう。カリブの島々にとっては、長きにわたる植民地の歴史は彼らの本当の歴史ではないゆえに、帝国主義からの脱植民化とは、「自分自身の声」で語るということであり、コンデの『わたしはティチューバ』は、歴史改変によって女奴隷の存在を回復させようとする試みの中でも、同様のスタンスが表現されていると思われるのである。

②「国際学会に参加して——ALAとユタ大学」

三石庸子・石田依子

日米黒人研究者交流の二年目は、二名ずつ研究者を送り、受け入れる交換プログラムが生まれ、日本側からは三石と石田が参加した。今年度日本側は基金が貰えな

いことになるなど計画中止が危ぶまれたが、木内・中地両氏のご尽力により連休明け頃ジャパンファンドが得られることが決まり、慌しく出発した。来年は基金が得られないため、やむを得ず中止するようである。5月25日から28日にサンフランシスコで開かれたALA(American Literature Association)に、AALCS(African American Literature and Culture Society)の一員として、AALCSの主催するセッションで発表した。25日に「国際的な視野」のパネルでは、坂下史子氏のムミア・アブジャマルに関する発表その他とともに、三石がトニ・モリスンの『ラブ』について、26日に「19世紀」のパネルで石田がバーバラ・チェイス＝リボウの『サリー・ヘミングズ』について発表した。アメリカ側研究者は学会主催で多忙な中、一晩木内氏をはじめとする我われ日本人研究者と交流の機会をもってくれた。(三石)

ALAが開催されたサンフランシスコを後にして、5月29日に私たちはキース・バイアマン先生とともにユタ州ソルトレイクシティへと向かった。ユタ大学のウィルフレッド・サミュエルズ先生のご尽力のもと、当大学の学生たちの前で発表させていただくことが主たる目的である。5日間の滞在中、サミュエルズ先生が担当されているトニ・モリスンの授業を見学させていただいたが、学生たちが活発に議論する様子には驚かされた。私たちが発表したのは、6月2日であったが、同じくサミュエルズ先生のクラスの学生たちに対してであった。三石の発表はトニ・モリスンについて、石田はバーバラ・チェイス＝リボウについて話した。発表終了後、質問も交えて、ユタ大学の学生たちと交流の機会がもてたことは、私たちにとっては貴重な経験であったと思う。(石田)

最後に、黒人研究の会に感謝の意を表明するとともに、ジャパンファンドからの助成金を得るために、大変なご苦勞をおかけした木内・中地両氏には心からの御礼を申し上げたい。

会員からの投稿

いま、アメリカを研究するのは、何のため誰のためなのか？

2006.11.24

須田 稔

「アメリカは非福祉国家の典型国である」(p.14)、「環境対策に深入りすると、経済成長が阻害されるという信念がアメリカでは強い」(p.19)、「アメリカは市場原理尊重・弱肉強食是認である」(p.20)、「アメリカの所得分配の不平等

度（貧富の差）は先進国の中で最高であることは有名である」（p.21）が、「アメリカ国民の多数は貧富の格差が大きいことを容認している」（p.22）。京都大学大学院経済学研究科教授で2005年度日本経済学会会長の橋本俊詔氏が自著『アメリカ型不安社会でいいのか』（朝日選書、2006. 8.25）で書いている。

11月21日、「飢餓に対抗するニューヨーク市連合」が、農務省の2003-05年の統計をふまえての調査結果を発表したところによると、同市人口の6人に1人に相当する125万6000人が「十分な食糧を購入する事の出来ない家庭」に暮らしていて、2000-2003年の14%から15.4%に増加し、同州全体でも9.4%から10.4%に増えたという。所得収入総額が増加し同時に貧困人口が増えた全国で唯一の州、「富の不均衡の先進州」と国勢調査局もいう。

日本もアメリカ型社会に近づいていて、財務省の「法人企業統計」を見ると、資本金10億円以上の大企業の経常利益は、1995年の13兆9049億円が2005年に29兆4326億円と、10年間に2.1倍、他方、大企業の労働者の給与総額は1995年の42兆5430億円が2005年には39兆6475億円に減り、労働者数は同期間に724万人から674万人に。

OECD（経済協力開発機構）による2000年前後の計測では、平均貧困率は10.4%、最高はメキシコの20.3%、第2位アメリカ17.1%、第3位トルコ15.9%、第4位アイルランド15.4%、そして第5位日本15.3%、最低貧困率は福祉国家デンマークの4.3%。（前掲、橋本p. 112）。

先進国で最高の貧富の格差・貧困率のアメリカが、いまでもイラクで対テロ戦争を続けている。第二次大戦後から今日までにアメリカは21の国・地域に武力攻撃をしかけ、国防総省の軍事施設は他国の領土に800余り、世界の軍事費7980億ドル（2000年）のうち米国が37%を占め、1996年から2000年にかけて流通した全軍需品の47%に関わっているというストックホルム国際平和研究所の2001年版報告書がある（チャルマーズ・ジョンソン『帝国アメリカと日本 武力依存の構造』集英社新書、2004）。

「クリントン時代に、傑出した政治アナリストのサミュエル・ハンチントンはこう述べている。世界の多くの地域にとってアメリカは「ならず者超大国になりつつあり、他国の社会に対する外部からの唯一最大の脅威」と考えられている。ロバート・ジャーヴィスは米政治学会の会長だった頃、「世界の多くの人々から見れば、今日、最大のならず者国家はむしろアメリカなのだ」と警告した。」

（ノーム・チョムスキー『覇権か、生存か—アメリカの世界戦略と人類の未来』集英社新書、2004）。

1988年当時、マンデラ率いるアフリカ民族会議は、「世界でもっとも悪名高いテロ集団の一つ」とされていました、とチョムスキーは2002年5月25日の講演で語っていた。（鶴見俊輔監修『ノーム・チョムスキー』リトル・モア、2002）。

「我々は、世界の大半において米国が、十分な根拠をもって、「テロ国家の親玉」と見なされている事実を認めるべきである。例えば、1986年に米国は国際司法裁判所で「無法な力の使用＝国際テロ」の廉で有罪を宣告されたうえ、すべての国＝米国に国際法遵守を求める安全保障理事会の決議に拒否権を発動したことを想起すべきかもしれない。無数にあるうちのたった一つの例である。」（ノーム・チョムスキー『9.11 アメリカに報復する資格はない』文藝春秋、2001）。

こういう風に見てくると、1967年4月4日、ニューヨークのリヴァサイド教会でヴェトナム戦争に毅然と反対を表明したマーティン・ルーサー・キング牧師の洞察の先見性を称揚せずにはおれない。「今日の世界における暴力の最大の調達人、ほかならぬ私のアメリカ政府」という発言は、非暴力を信奉する宗教者の倫理観に根ざすとしても、「ヴェトナムでヴェトナム人一人を殺すのに33万2000ドルを使うかたわら、国内の貧困者のためには一人当たり僅か53ドルしか支出しない」とか、「この恐ろしい戦争を遂行するのに一年に350億ドルも支出しておきながら、つい先日国会はわが国のスラムやゲットーのネズミ駆除に4400万ドルを支出することを否決した」などの告発は、貧困・差別・格差を解消するためにこそ政治はあるべきで、戦争はそれらを解決するどころか、逆に一層深刻化するものでしかない、という人権活動者の政治観に支えられたものだ。

日本がアメリカの帝国主義的テロリズムの戦争戦略に追随するとき、対象領域・主題の枠を超えて、知識人としての研究者は、非戦・反差別・抗弱肉強食・貧困撲滅の行動を求められている。

（立命館大学・名誉教授）

カリフォルニア・ミシガン短信

坂下 史子

10月12日（木） 今日からAmerican Studies Associationの年次大会に参加。場所はカリフォルニア州オークランド市、チャイナタウンから通りを挟んですぐのマリオットホテル。高層ビルや高級マンションなど市中心部の開発が目ざましく進んでいて驚くと同時に、チャイナタウン側や少し離れたマイノリティ居住区は開発の波から取り残されたように寂れたままで、そのギャップに再び驚く。富の不平等分配はど

この町でも同じようだ。学会の今日の目玉は、アンジェラ・デービスのセッション「Black Panther Party, Reflections in Light of Forty Years」。予想通り会場は超満員で、かつての活動を振り返る貴重な「生き証人」のコメントに聴衆は熱心に耳を傾けていた。司会者がデービスに、今や文化アイコンとなった自分の地位をどう思うかと聞き、デービスが「私はまだ生きているし、Tシャツに自分の顔がのっているのは正直恥ずかしいわ」というようなことを言っていて面白かった。明日から三日間にわたって、ブラックパンサー党40周年の記念コンファレンスがあるらしい。そちらにも行きたいところだが、残念ながら今回はASAだけで手一杯。

10月13日（金） ユリ・コウチヤマのセッション「Afro/Asian Art and Activism in the 1960s and Post-1960s Era」に出る。こちらも歴史の「生き証人」。歩行補助器を押して会場入りする活動家の姿にはただ敬服するしかない。セッション後、知人で琉球大学助教授の阿部小涼氏と談笑しているところに黒人研会員のYuichiro Onishi氏が通りかかり、三人で喋っているうちに、沖縄の反基地運動に深く関わっている阿部氏が反基地運動のドキュメンタリー・ビデオを持参していることを知る。ミシガン州立大学で上映したい旨申し出、ビデオのコピーを譲っていただくことに。一月にMSUで開催される「Global Radicalisms」というコンファレンスに、彼女と一緒に反基地運動に関するセッションを応募する案を思いつく。

10月15日（日） ASA終了後、ブラック・パンサー党の40周年リユニオン・ピクニックに出かける。場所はウェスト・オークランドのとある公園。滞在先の日系人の友人が、「この地域は危ないから、行くのはあまりお勧めできない」と言っていたのを思い出し、多くの人々がデトロイトを形容するのと同じだなと気づく。しかし行ってみれば、全米各地のチャプターから集まったパンサーの人々が、楽しい時間を過ごしているだけのこと。かのキャサリン・クリーヴァーとボビー・シールがくじ引き抽選会をやっていて、何だか微笑ましかった。抽選会の収益金は政治犯釈放のために使われるとか。

10月16日（月） オークランドの映画館で『The Last Atomic Bomb: A Survivor's Story』を観る。長崎で被爆した人々、特に現在も被爆の経験を語り継いでいる数人に焦点を当てたドキュメンタリー。作品自体はよくできていたが、非核運動のディスコースに被爆者の証言が利用されている感を否めなかったのも事実。私の見方が穿っているのだろうか。焼け焦げた被爆者の死体の写真をそこかしこに用いた映像を見な

がら、自分自身の研究でリンチ犠牲者の写真や人種暴力の描写といった「史料」をどう扱うべきなのか、という問題に再び直面する。

10月22日（日） ミシガン州イースト・ランシング市の自宅に数人の友人を集め、阿部氏に譲っていただいたドキュメンタリー『海にすわる』と『Marines Go Home』のビデオ上映会を行う。『海にすわる』は、沖縄の辺野古での600日にわたる基地建設反対運動を追った一時間のテレビ番組。『Marines Go Home』の方は、北海道矢臼別、韓国梅香里、辺野古の反基地運動を記録した二時間を超える大作である。監督は現在プロモーションのため全米を横断中らしい。相談の結果、『海にすわる』の上映とラウンドテーブルを組み合わせたセッションをコンファレンスに応募することに決定。『Marines Go Home』の上映会も別立てで企画するつもり。アメリカで反基地運動のドキュメンタリーを観ることになるというのも、何かの巡り合わせかもしれない。

11月2日（木） 歴史学部のリチャード・トーマス教授に会う。彼が1959年から60年にかけて沖縄に駐留していたことをたまたま阿部氏に話したところ、一月のコンファレンスに来る際ぜひインタビューしたいということになり、教授に事の成り行きを説明し許可をもらうべく、アポを取った次第。申し出を快諾して下さっただけでなく、単なる打ち合わせにもかかわらず、トーマス教授の沖縄の話は尽きない。そしてそのどれもが示唆に富む。例えば、米兵の衣服を洗濯する仕事をしていた地元の女性に対する、黒人兵と白人兵の対応の違い。黒人兵は彼女達を「ママさん」と呼び、敬意を払って接したという。「だって、我々の母親や祖母達だって、同じように洗濯の仕事をして我々を育ててくれたんだからね。」つい先日読み終えた、20世紀初頭の黒人女性家事労働者の歴史に関する本を思い出す。沖縄での経験の二年後にバプテストからバハイ教に改宗した彼は、19～20歳の青年期をいわゆる有色人種の国で初めて過ごした経験が、人種や宗教、文化の多様性を受け入れる素地を作ったと言う。まさに、人に歴史あり。

11月6日（月） かねてから観たいと思っていた『Catch A Fire』を観る。実話に基づく映画で、舞台は1980年代アパルトヘイト下の南アフリカ。テロリストの疑いをかけられて逮捕された政治に無関心な主人公が、釈放後自ら政治活動に身を投じ、南ア白人の言う「テロリスト」となって自由のために闘うという内容。『アントワン・フィッシャー』のデレク・ルークが主演、ティム・ロビンスがテロリストを検挙する

刑事を演じている。誰にとっての「テロリスト」、「テロリズム」か？という問いは、そのまま現在の「テロとの戦い」に通じる。

11月8日（水） 昨日の中間選挙の結果、ミシガンでは最大の争点（であるはず）だった、アフーマティヴ・アクション廃止のために州法を修正するというプロポーザル2が、59%対41%の賛成多数で可決。これでアフーマティヴ・アクションが廃止される州としては、カリフォルニア、ワシントンに続いて三番目という不名誉に。そのこと自体も残念だが、何よりも、この結果に憤慨している学生が少ないように感じるのは気のせいだろうか？（と思っていたら、翌週MSUのある学生団体が学長らとの対話の場を設けたことを知る。大学としての立場を表明せよと要求しているらしい。）

11月9日（木） 一月のコンファレンスのセッション要旨をメールで送る。タイトルは『We Disagree: Global Anti-Base Struggles and the Role of Scholars』。『海にすわる』を上映した後、阿部氏を含むパネリストが、アメリカ帝国主義、トランスナショナル・アメリカン・スタディーズ、アカデミズムとアクティヴィズム、研究者の役割、などについて議論する予定。

11月18日（土） コンファレンス担当者から、応募したセッションが受理されたとのメールが届く。同日、阿部氏がラウンドテーブルへの参加を依頼していたアメリカン・スタディーズの大御所で、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校ブラック・スタディーズ学部にも所属するジョージ・リップシッツ教授から、パネリスト受諾の返事もらう。阿部氏とリップシッツ教授をパネリストに迎え、司会は私が務めることに。『Marines Go Home』上映会の企画の方も、アジアン・スタディーズ・センターに掛け合って動き出した。一月下旬は忙しくなりそうだ。

（ミシガン州立大学大学院）

日本人ジャズピアニストに米最高栄誉賞

1956年に渡米し、ルー・タバキンとジャズオーケストラを結成するなどジャズピアニストとして活躍した秋吉敏子に、米ジャズ界の最高栄誉であるジャズマスターズ賞を贈る旨、米国立芸術基金（NEA）が2006年10月7日に発表した。なお、秋吉は1976年に水俣の公害を題材にした曲を含むアルバム *Insights* を録音、『ダウンビ

ート』誌の国際批評家投票で「レコード・オブ・ザ・イヤー」に選ばれ、99年には日本人で初めて「国際ジャズ名誉の殿堂」入りをしていた。

(文責：古川博巳・黒人研究の会顧問)

音楽生活60周年の今年、5年前の8月6日に広島で初演された秋吉の作品『ヒロシマ～そして終焉から』第三楽章の「HOPE希望」が谷川俊太郎の作詞でシングル盤として発売された（ピアノ秋吉、歌手・訳詩は娘のMonday満ちる）。なお、2007年度のN.E.A.(National Endowment for the Arts) フェローシップ受賞予定者は秋吉の他にアフリカン・アメリカンではCurtis Fuller (Trombone), Ramsey Lewis (Piano), Jimmy Scott (Vocal), Frank Wess (Flute, Tenor Sax) が含まれている。

(補記：鉄井孝司)

海外のメディアから

来年（2007年）夏、ニューヨーク、ハーレムにフレデリック・ダグラスの像が建設されることになったというニュース。ニューヨーク・タイムス11月3日掲載。

Summoning Frederick Douglass

By FRANCIS X. CLINES

For all his exultation in fleeing slavery to New York on the Underground Railroad, Frederick Douglass recalled how formidable the city soon seemed. “The loneliness overcame me,” he wrote of his first perch upon liberty in 1838, before he blazed into history as the articulator of African-Americans’ determination to shuck slavery. “There I was in the midst of thousands, and yet a perfect stranger,” Douglass recorded of his early glimpse of New Yorkers. “I dared not to unfold to any of them my sad condition.”

That such a powerful individual could be so daunted by the city, like so many ordinary newcomers, makes it all the sweeter that Douglass will be properly welcomed next summer at Harlem’s gateway. His statue likeness, noble and powerful as the man, will peer forth at the skyline. The setting includes a 60-foot-long, laser-lit fountain,

flowing with the waters of freedom, and an array of the quilted code symbols that were one of the ingenious secrets of the slaves' escape north.

Strategic quilts, harmlessly hung out to air along the routes toward liberty, offered instructions and maps to knowledgeable slaves on the run. Their innocent symbols — wagon wheel, crossed wrenches, bear's paw, log cabin, child's shoofly — were guides and cautions, just as patterns of knots marked mileage. These symbols are being rendered in multi-hued granite squares by Algernon Miller, a New York artist, as part of his Douglass tribute, under construction in a European-styled traffic circle and park bordering the northwest corner of Central Park. Mr. Miller's boyhood was spent at play on the circle's surrounding streets; an earlier work celebrated the Seneca Village community of African-American landholders displaced in the making of Central Park. "Things just came together," he said of the muse he found in the quilted subtext of the Underground Railroad.

In contrast, the eight-foot statue catching Douglass *in* the classical pose of his daguerreotypes was done by Gabriel Koren, a Hungarian-born sculptor so fascinated as a child by far-off African-American human rights leaders that she came to specialize in them. "They are so interesting, so magnetic." Her Malcolm X glares forth handsomely in Harlem, and her Marcus Garvey reigns lately in her city studio. "I fought against doing Douglass 20 or 30 feet high, totally removed from ordinary people," said Ms. Koren, seeing to a proper welcome for the singular fugitive who landed here on his way into history.

入 会 者

井上 正子 氏

ニューヨーク州立大学オルバニー校 女性学修士修了。立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻博士後期課程退学。カリブ文学、アメリカ黒人文学、女性学に関心がある。共著に『カリブの風---英語文学とその周辺』鷹書房弓プレス(2004)等。どうぞ宜しくお願い致します。

小泉 泉 氏

跡見学園女子大学、日本女子大学、大東文化大学非常勤講師

現在非常勤講師をしておりますが、来年4月より博士論文を目指して、新たな気持ちで研究に取り組んでいきたいと思っております。研究対象は黒人女性作家で、主に Zora Neale Hurston、Toni Morrison を中心に研究しております。今後、広く視野をもちながら論文のテーマを絞っていききたいと思っております。何卒よろしく願いいたします。

高廣 凡子 氏

大阪府立大学人間社会学研究科研究生

専門はアメリカ現代史・アメリカ現代社会論・アメリカ社会運動史。現在の研究テーマは、1960年代後半から70年代を主たる考察対象とし、人種・エスニシティをめぐる監獄・刑罰を中心とした排除と包摂の技術と社会秩序編成を、それに対抗する運動から捉え返す歴史社会学的研究。

古川 晃子 氏

現在、広島大学大学院文学研究科博士課程後期1回生です。アリス・ウォーカーの『カラーパープル』を卒業論文で研究したときから黒人文学に興味を持ち、それ以来、ウォーカーの他にトニ・モリスンやゾラ・ニール・ハーストンの作品に特に関心を寄せています。修士論文に引き続き、文学作品の分析を通して黒人の宗教性の研究をしていきたいと考えています。どうぞ宜しくお願い致します。

退 会 者

佐々本 誠治 氏

会 員 消 息

野川 浩美 氏

明治大学非常勤講師

和田 フミ子氏

訃 報

小西 友七 氏

2006年9月10日死去、89歳。小西先生は黒人研究の会の創設に係わり、J・L・ディラード『黒人の英語』なども訳出された。『ジーニアス英和辞典』をはじめとする辞書の編纂でも著名。神戸市外国語大学で長らく教え、同大名誉教授。ご冥福をお祈りします。

水田 寿一 氏

立教大学で長く教鞭をとられた会員の水田先生が、11月12日に逝去されました（78歳）。ご冥福をお祈りします。

<編集> 黒人研究の会・編集部
〒603-8143 京都市北区小山上総町
大谷大学文学部・古川哲史研究室気付

<編集者> 鉄井孝司